

〔資料紹介・翻刻〕

（山口県立山口図書館蔵） 木村豊平 『蒲園文章』

小野 美典

木村豊平の文集『蒲園文章』を翻刻する。

本書は、山口県立山口図書館所蔵の写本で、管見に入る限りでは他に所蔵先を見ない孤本である。また、後述のように自筆本の可能性が高く、豊平研究に欠かせない貴重な資料でもある。

稿者は、周防国岩淵村出身の幕末維新期の歌人・国学者近藤芳樹の研究を進めているが〔注1〕、その芳樹を和歌山の本居太平や大阪の村田春門に紹介し、入門の仲介をしたのが木村豊平であった。豊平は芳樹と同郷（現在の山口県防府市）の出身で、芳樹の兄弟子にあたる。芳樹研究（特にその若年期の閲歴研究）には木村豊平の研究は不可欠である〔注2〕。ここに、本書を翻刻する第一の意義がある。

また豊平の和歌や語学研究・医学書は単独で見ても高い水準であり、豊平は近世後期の文化人としても重要な人物と言える。豊平研究は、近世後期の和歌・国学・医学の研究に益するところが多いであろう。本書翻刻の第二の意義がここにある。

豊平は多くの著作をものしたようだが、版本として出版されたもの以外は散逸したものが多く。幸い山口県立山口図書館には、豊平の歌集『鏡乃屋歌集』と文集『蒲園文章』が蔵されている。この歌

文集を詳細に見ていけば、豊平の文学世界が明らかめられるであろうし、また、両者には個人名や日付も多く見られるので、豊平の閲歴や交友関係を知る手掛かりともなるであろう。『鏡乃屋歌集』は既に翻刻されている〔注3〕ので、『蒲園文章』を今回ここに翻刻し、豊平の文学研究と閲歴解明に、また近藤芳樹ほか近世後期の文人研究に資したいと思う。

以下、底本の書誌と内容、木村豊平の略歴について簡単に述べる。

〔一〕書誌

外題―なし。

内題―蒲園文章

序跋―なし。

寸法―縦二二・六釐×横一五・九釐

用紙など―片面十行の罫線を刷った楮紙系の用紙、袋綴。表紙

は浅葱色で型押し雲文様。

紙数―二十丁。前後に遊紙が一丁ずつあり。計二十二丁。

本書は、山口県立山口図書館所蔵（整理番号「Y九一・一A」）の写本で、木村豊平の歌集『鏡乃屋歌集』とともに二冊で一帙に納

められている。同帙左肩に『鏡乃屋歌文集 木村豊平自筆稿本』の題簽があり、『鏡乃屋歌文集』が所蔵者認定書名となっている（よって『蒲園文草』の名では本書は検索できない）。帙の内側には次のような印刷物〔注4〕が糊付けされている。参考資料となりうるので、次に全文を掲げる。

木村豊平歌文集 豊平自筆稿本 帙入 大ニ 二〇、〇〇

鏡乃屋歌文集一卷、蒲園文草一卷、何れも豊平の自筆にして歌集には大平云、春門云、等の如く主として師大平の評語を籠頭せり。大平の評語は大平の自筆なりや、或は豊平がこれを写せるものなりや明らかならざれど巻末に「右天保二年卯七月師に見せおくりたるを加筆してかへされたるなり」と記せり。歌集四十丁、文集二十丁、二冊を一帙に収む。但し豊平は周防三田尻の人にて本居大平の門に国学を修めたる人、著書として医事啓蒙、察病規範、徴家要領、薬品纂要、延命家言、痢疾要領、蒲園隨筆其他あり。

〔一〕内容

『蒲園文草』は豊平の文集である。長短十五編の文章からなり、概ね年代順に配列されている。内容は、自他の著作の序跋や人の依頼で草した詞、或いは消息文・随想などである。文中には個人名や日付も見られ、豊平の交友関係・閱歴を知る手掛かりとなる。参考までに、十五編に仮題を付して、文中に見られる人物名（傍線）・地名・日付を挙げると次のようになる。人物名の後の（ ）は本文中に明示された当人の居住地を示す。【十】には手掛かりはない。

【一】漂流者が長崎に寄港して喜ぶのを見て—長崎 大はと、瓊浦、
文政九年十二月廿四日

【二】中沢守臣の歌集の序—中沢守臣（筑前国）

【三】元野木颯持の梅垣内の詞—元野木颯持（筑前国黒崎）

【四】山下蓬輔の書画帖の序—山下蓬輔（伊予国松山）、赤間関、
文政十年四月八日

【五】末松真風の水穂庵の詞—末松真風（宮市）、文政十一年初冬

【六】伊藤よし定の名松の垣内の詞—伊藤よし定（萩）

【七】桑原正倫の佐迎伎の屋の詞—桑原正倫〔注5〕

【八】長谷川直輔の松のすみかの詞—長谷川直輔〔注6〕

【九】冷泉淳風の曙のすみかの詞—冷泉淳風（三田尻、萩）、文政
十一年冬

【十】雪の夜あばら屋に琴を弾くという題にて—なし

【十一】師の大平への返書—本居大平（紀伊国）、中山氏、高橋氏、
石金氏（陸奥国）、文政十一年六月廿三日

【十二】赤間関で神鏡を掘り出して—有馬直定（赤間関）、長門国
赤間関伊崎の新地、文政十二年三月廿五日、同五月廿八日

【十三】故鈴屋大人の御霊の御前に申す詞—紀伊国、文政十二年九
月廿五日

【十四】自著徴家要領の跋—山田義章、文政十二年十二月廿八日

【十五】花の山口の跋—藤垣内（本居大平）、田中延香、中村広定、
紀国、文政十三年春

〔三〕豊平自筆本か

本書と同帙に納まる『鏡乃屋歌集』を翻刻した御園生氏は、その例言〔注3〕で「本詠草は豊平の自筆本で、後に鈴木高輅の手に帰し、現在は県立山口図書館の所蔵となっている」と述べる。『蒲園

文章』も『鏡乃屋歌集』と同一の野紙に同一書体で筆記されており、御蘭生氏の認定が正しいとすれば、『蒲園文章』も豊平自筆本と考えて差し支えないと思われる。また、『鏡乃屋歌集』と『蒲園文章』を詳細に検討した小川五郎氏も「豊平自筆の歌集と文集である」と述べる（注7）。更には、帙に記された『鏡乃屋歌文集 木村豊平自筆稿本』という書名、並びに帙に糊付された解説書（前掲）も参考になる。稿者は筆跡の鑑定を軽々にはなし得ないが、先学によって『蒲園文章』を木村豊平自筆本とする指摘があることをここに明記しておくきたい。

〔四〕 木村豊平について

木村豊平の著作の翻刻は、前掲の御蘭生氏による『鏡乃屋歌集』以外に、小川五郎氏による『木村豊平拾遺和歌集』（歌集名は小川氏による仮題）（注8）がある。

また、豊平関係の書簡類の紹介ならびに豊平の総合的伝記研究としては、小川氏による一連の考察（注9）が詳しい。他に、吉田祥朔氏の研究（注10）や、医学史の方面からの田中助一氏の考察（注11）が参考になる。辞典類で立項するものも多いが、それらも含めてほとんどの考察は、『鏡乃屋歌集』『蒲園文章』『木村豊平拾遺和歌集』と版本『五十連音麻曾鏡』並びに書簡類の記述に依拠している。最後に、木村豊平について、右の研究をもとに簡単に紹介しておく。

木村豊平は、江戸時代後期に活躍した歌人・国学者・医師である。周防国三田尻村（現在の山口県防府市）に生まれ（生年未詳）、通称を陽蔵、名を豊平・真楨、号を秋亭（周亭）・鏡乃屋・蒲園な

どと言った。若くして防府天満宮の社官鈴木直道に和歌・国学を学び、のち和歌山の本居大平、文政六年（一八二三）二月には大阪の村田春門、同年九月には日田の広瀬淡窓にそれぞれ入門している（ただし淡窓のものは数句で辞去）。その後医学に志して上方で修業し、オランダ医学をシーボルトに学ぶべく長崎にも赴いた。後年は医学に精進する一方で和歌・国学にも精励。天保三年（一八三二）九月一日没（享年三十数歳、乃至は四十歳前後か）。版本に語学書『五十連音麻曾鏡』・医書『徽家要領』、写本に『鏡乃屋歌集』『蒲園文章』『木村豊平拾遺和歌集』（仮題）などが知られ、その他散逸したものも多い。

《注》

1 近藤芳樹に関する稿者の論考は以下を参照。

小野美典 a 「毛利広鎮の『類題玉函集』について―成立年次を中心にして―」（『語文』一三三輯、平成21年3月）

小野美典 b 「近藤芳樹の編集した類題和歌集について―『類題阿武の杣板』『類題風月集』『類題和歌月波集』―」（『語文』一三三輯、平成21年12月）

小野美典 c 「近藤芳樹の類題和歌集編集の一端―『類題阿武の杣板』の編集―」（『桜文論叢』七八卷、平成22年11月）

小野美典 d 「近藤芳樹編『類題阿武の杣板』について―歌人の考察を通して見えるもの―」（『語文』一三八輯、平成22年12月）

小野美典 e 「近藤芳樹『たのむのかり』の成立―写本二種と版本を手掛かりにして―」（『桜文論叢』八〇卷、平成23年9月）

また、近藤芳樹の関係した資料の、稿者による翻刻は、以下を

参照。

小野美典 f・g 「資料紹介・翻刻」(山口県文書館蔵) 毛利広

鎮『類題玉函集 上/下』(『山口国文』三二号/三三号、平成

21年3月/同22年3月)

小野美典 h・i、茅原雅之、永吉寛行、鹿野しのぶ、千葉篤胤

「資料紹介・翻刻」近藤芳樹編『類題阿武の杣板 上/下』(『語

文』一三七輯/一三八輯、平成22年6月/同年12月)

2 近藤芳樹と木村豊平の関係については、注1の拙稿eを参照。

3 御菌生翁甫編輯『防府史料 第三輯』鏡の屋歌集』(防府郷土

資料保存会発行、昭和17年11月)

4 本書を展覧した際の資料、或いは入札目録の類いを切り取った

ものか。『鏡乃屋歌集』『蒲園文章』ともに、昭和十三年二月十

五日の山口図書館印があるので、両本はその頃図書館所蔵と

なったことがわかり、この印刷物はそれ以前のもものと思われる。

5 文中に桑原正倫の居住地の手掛かりはない。ただし、『類題阿

武の杣板』に同一姓名の歌人が見られ、八首入集している。恐

らく同一人物と見てよいと思われ、この人物は周防国か長門国

の歌人ということになる(注1の拙稿 d・h・i 参照)。

6 注5の桑原正倫と同じく『類題阿武の杣板』に九首入集。周防

国か長門国の歌人であろう。

7 小川五郎「木村豊平伝記資料(二)」(『水可美』七卷三号、昭

和14年3月)

8 小川五郎編輯『防府史料 第九輯』木村豊平拾遺和歌集』(防

府市教育委員会発行、昭和41年3月)

9 小川五郎「本居大平の手紙」(『水可美』七卷一号、昭和14年1月)

小川五郎「木村豊平伝記資料(一)〜(四)」(『水可美』七卷二
五号、昭和14年2〜5月)

小川五郎「木村豊平の長歌」(『あらつち』一〇巻九号、昭和34

年9月、のち『防長文化史雑考』収録)

10 吉田祥朔「歌人木村秋亭」(『防長文化』第一巻第二号、昭和12

年4月)

11 田中助一「防長医学史 下巻」(同書刊行後援会発行、昭和28

年7月、四三三〜四三四頁)

《付記》

本稿を成すにあたり、資料の閲覧・写真撮影・翻刻のご許可を下
さった山口県立山口図書館に、衷心よりお礼申し上げます。

なお、『鏡乃屋歌集』を翻刻された御菌生氏は、その末尾に「続
刊書目」(翻刻予定書目)として『蒲園文章』を挙げられたが、未
刊のままに終わった。御菌生氏のご意志は「防府史料」の発行者で
ある「防府郷土史料保存会」に受け継がれ、当保存会は紆余曲折を
へて現在の防府市立図書館内に置かれている。当保存会が『蒲園文
草』の翻刻を考えていない旨、防府市立図書館にご確認の上、今回
ご了解を得てこのような形で翻刻させていただいた。木村豊平の郷
里防長の地で、且つ『蒲園文章』の現所蔵者である山口県立山口図
書館ゆかりの地にある山口大学人文学部の学術雑誌に、本翻刻を掲
載することができたのは、稿者にとって望外の喜びである。改めて、
関係各位にお礼申し上げます。

《凡例》

一、底本を忠実に翻刻するようにつとめたが、紙幅の都合と読解の便宜から、次のような校訂を施した。

(ア) 表題に【】付きの漢数字で通し番号を付した。また、表題は太字とした。

(イ) 頁移りは「」で区切り、丁数を漢数字、表・裏をオ・ウとして()内に記した。改行箇所のみ示しはしなかった。

(ウ) 和歌は二字下げ、付記などは四字下げで統一した。

(エ) 各表題で一つの文章と考えて一纏めで扱い、表題が変わるごとに一行の空きを設けた(底本には空きはない)。

(オ) 適宜、句読点を施した(底本には句読点・濁点はない)。

一、仮名は、現行の字体に統一した。

一、漢字は、常用漢字表に掲載されているものはその字体を用い、表外漢字は旧字体とした。

一、異体字・俗字体のうちで、正字体が常用漢字表に掲載されているものは常用漢字体を用いた(例 菴↓庵)。ただし、「歌・哥」は表記が混在するのでそのままとした。

一、踊り字(、・、)も底本のままとした。

一、振り仮名もそのままとした。

一、割書部分は、「」内に入れて区別した。

一、虫損により判読の困難な部分は、□囲みで想定される字を補った。

一、その他の問題点や留意点は、「」内にアルファベットを付し、末尾に一括して注記した。

蒲園文章

木村豊平

【一】さつまの国人の、から国にた、よひゆきたるを、このころ長崎に入来たる舟のたよりにおくられ来て、その舟より小舟にうつりてよるこふさまを見て

ことし文政九年といふとしの十二月廿四日の長崎のみなどに、唐船例のことにてはてたり。その舟に、さつまの国人とて、すきにしころかのから国まで船にてなかれゆきたるよしにて、こたひから舟にのせてきたりたる十二人、けふ大はと、いふ所に「(オ)長崎の浦にあかれりけるを見るに、もとは十三人なりしか、いまひとりはこの国にてなくなりたるよしへり。その人々のいる青く袖なき衣きたるか、なよくとして、いとよわけなるものから、かつうれしけなるさまも見ゆるなりけり。からといへは、きくたにいとほるかなるを、その国までゆきけむ人々のこゝろのほとよ、おしはかられてあはれなり。

うしほ路のからさうきめを見し人もまたかへるなみありときく
なり(ニウ)

かへるなみたまのうらへによるかひもからきいのちのあれはな
りけり

かくよめるは長崎浦を瓊浦ともいふといへはなり。

【二】筑前国人中沢守臣かみつからの歌かくへき料の巻にかきそへ
たる詞

言の葉の道いよく、ますくさかゆくまにく、後の世のわろきくせ
をもわきためて、いにしへのた、しきをまはんと心かくる人おほ

くなりにたれと、なほ暁しらぬいたなきは、後の」(二三オ)よのをくらきやみにのみなつみてあるを、みつくりの中沢ぬしは、さるつたなき心にはあらで、いそのかみふるきむかしのあきらけき(注A)跡をたつねてものしたまひて、このほとよみいてられたる歌ともを、この一卷につきくにかきつかむとて、まつおのれに一言かきそへてよとこはるゝに、

言の葉のおちくる〔注B〕ま、にかきつめはちりひちつもり山となりなむ
とそかきてつかはしける。

【三】元野木庵持かこへる梅の垣内の詞(二ウ)

もの学ふ家の名を梅垣内と名つけて、筑前国黒さきの駅に家居する人あり。古学の道に心ざしふかき人にて、元野木みかもちぬしといふなる。そのうめのかきつと名つけたるよしは、梅の木のとしふりたるかやとにあればなりけり。これかうたをとおるしのこへるに、
みやひたる宿のあるしの心をは梅の色香をたつねてそしる
色も香もあるしに似たる宿の名や梅の垣内とうへもいひけり

(二三オ)

【四】伊与国松山里人山下蓬輔、医師の術おこなはむために、此はと赤間関にかりぬしてありけるか、そのいとまのひまには何くれのみやひをこのみて、書画帖といふものをものせむとて、歌巻のはしめにかきつくへき詞こひけるに、四月八日おのれ彼ノ地をいてたちてかへらむとするほとにて、こといそかしけれと、もとより心やすきなかなれば、た、いさ、かたにとおもひて、たちなからかける詞

(三ウ)

てにまれ、ゑにまれ、歌にまれ、からうたにまれ、その人々にこひもとめてものすなるは、いまの世おしなへたるはやりことなりけり。山下氏そのことすとて、かれやこれやとことひろくものするかなかに、此一巻は歌のみをつきつきにかきつかむとて、まつおのれにひとことかきそへてよとこへるに、

すゑつひにかきあつめな言の葉の花ちりつもり山をなすらむとよみてつかはしつ。文政十年の夏。(四オ)

【五】末松真風かこへる水穂庵の詞

うつせみのよに、めか、やくたからはあれと、そはすゑにて、五穀なも人のいのちつくへき本にてありける。そか中にも又たくひなきは稲穂にて、これにまされるものはよにはあらし。遠つ国四方のこの国くは、このおひたちあしかめるを、たふときや皇国は、万よりもこれなもことにすくれてめてたかりける。されはこそ、水穂国とてもた、へたりけれ。こ、にももの学ふ家の名を水穂庵と名つけて、宮市ノ里(四ウ)に家居する人あり。末松真風子とそいへる。祖の代より家居ゆたけて、ことたらぬことなくて、あしひきの山田、たまたれの小田、五百町千町万よりもおほくしめられたり。家は大路におもてはならひたるものから、うしろは野ちにとほりて、人からは此田つくることになもむねと心よせられたりける。そは万のうへもおしはかられて、本を思へる人とこそおほゆれ。さる心にて、みつほのいほの名にもおふせたるなるへし。(五オ)

千五百秋これのあるしをつくる田は水ほのいほの名にはたかは

し

八栄穂の水穂のいほとちいほ秋さかえそゆかむこれのあるしも
かくかけるはそのあるしのこへるによりてなりけり。文政十一年初
冬。

【六】萩人伊藤よし定か家の名松の垣内の詞

あしひきの山、たまほこの道、のへをちのもり、こ、の里にもおひ
たちて露しもに色もうつらす、ふりつむゆきの下にもみとりわかえ
て、かはらぬ例にまつよの人のひきいづるなるは、松の木なりけり。」

(五ウ) そのふた葉より万代へぬへき色見えて、此やとの庵に、男女
ならひておなしさまにおのつからおひいてたる、いとめつらしけれ
は、つねの心のおき所と、ちとせのいにしへ学ふまなひの家の名に
もおふせたるなりと、そのよしともつはらにかたりて、これか哥を
と、伊藤よし定ぬしのこへるに(注C)

たまくしけくしけのふたのふたはより常にかはらぬ色見えてお
ひ出む松は君か家のちとせのほどをあらかしめしるすとならし
その」(六オ) 松の枝葉しみゆくことこのことこれのあるしもとも
にさかえむ

【七】桑原正倫かこへる佐迦伎の屋の詞

たまちはふ神をいはひ、かしこきすめらきに物さ、け奉るをりに、
此さかきの枝につけてたてまつれることのいにしへのものに見えた
るを思へは、これなむゆゑよしあるへきことなりける。そもく此
さかきよ、名はうつせみの世の人のありさまにもふさはしくて、山
すけのすか／＼しきかたにのみきよらにおひたてるなれば、君か御
さかえをおもひ、」(六ウ) おのかうへをもいのる人の心のあかさほ

とをあらはせる何と、かた／＼のゆゑよしにもあるへし。こ、にく
ははらの正倫主といふ人ありけり。その家の庵におひたてるさかき
のよろしきほとなるあるによりて、やかてみつからさか木のやと物
学ふいへの名にもおふせたるなりとて、これかうたをと、かの人の
こひもとむるに、上のくたりのことともをおもひよせて、

あきらけきふみよむ君か心よりさかきのやとは名つけ、らし
も」(七オ)

万代にさかきてふ名の宿なれば君もちとせのうたかひはなし

【八】長谷川直輔か家の名の松の住所の詞

松のすみかとは長谷川直輔主のもの学ひする家の名なるを、しか
つけたるよしは、家の庭によるしきほと松の、いと心よくたちの
ひて枝葉もことにしけりあひたるかあれはなりとぞ。あはれふさは
しの家の名や。あはれおむかしのやとの名や。今よりはますくにあ
るしの学ひも、ともにゆくすゑたのもしくその家の名にあはさらぬ」
(七ウ) や。

ときはなる松の色にそ見ゆるなる君かすみかのちよのさかえは
家の名のかはらぬ松にならひつ、君かまなひのあせすもあらな
む

かくかけるは、そのあるしのこへるによりてなり。

【九】冷泉淳風か物学ひする家の名の曙の住所のことは

何くれとよの中を思ひねの夢も跡なくさめぬれば、むすほ、れたる
心のほとといふせさも、は」(八オ) れゆく空によこ雲のたなひきあ
ひて、ほの／＼と明わたるけしきを見たらんには、おにかみもはら

たつましくめてたくおほえぬるを、それは何とかいはむと、人のたつねたらんには、曙のそらといはんほかなかるへし。そのあけほの、めてたきを心として、あきらけいにしへ書学ふ家の名を曙のすみかにつけたる人あり。冷泉淳風主といひて、その心はへのほとも家の名のさや／＼におむかしさは、むかしはおなし三田尻の里にともすみたるほ」(八ウ)とより、あけゆくそらのいちしるくおほえたるなり。今は此萩の里にすみて、学ひの道も家の名にはたかはすなんありける。さるをおのれこのころこ、に旅居するを、をりよしとて、かの学ひの家の詞かきてよと、ねんころにこひたまへるに、もとよりいなむ心もなければ、うたもひとつ、

家の名の明行そらのめてたきを君か心のおきところなるとなむよみてかきつけ、る。時は文政十一年冬のころ。」(九オ)

【十】雪の夜あれたる家に琴ひくといふをたいにてかける詞

夜中すくるほどより、風しつまりてゆきいたうふれり。物にまかりてかへらんとするほど、あやしうもの、音のきこゆるもゆかしうて、それをしるへにかたはらなる道をたとりつ、ゆくに、此家なりけり。よくなる筆をはんしき調にしらへて、かきならしたる、けしうはあらずかし。何かしのすみかなるらん、ついひちもうちくつれたるなめり。雪のたひらかならぬかたもあり。まもれる」(九ウ)人もなければ、よひ／＼ことにともいはて、すのこたつものにやをらよりめて、とはかりき、をりて、

琴のねも雪もえならぬ宿なからつれなき人をひきやとめける跡つくる人やあるなといひて、ねたますれば、

こからしにあれたる宿のうれたきはひきと、むへき言の葉もな

し

とて手ものこさすかきならずすゑに、うちあひてきこゆる山寺のかねの音におとろきてあたりを見れば、見さしつる伊勢源氏の二書のみありて、外には何こともな」(十オ)し。此ふみか、んと、よひのほどよりおもひねの夢なりけり。

【十一】紀伊国の師の許に奉れる消息文

過つる三月廿九日の御ふみ、四月廿八日こ、にいたりつき侍るに、めつらしくほと、きすなと待えたる心ちして、しつかふせやの柴の戸のおしひらきいそき見侍れば、去年の秋とことしの春と、二たひに奉りし文の御かへりことにたまへる文なりけり。まつとよ、たひらかにおはしますこと、中山氏高はし氏よりも、おなしさ」(十ウ)まにいひおこせたるをうけたまはり侍りて、なにわさよりもいとなむうれしくおもひたまへらる。さておのかをちなき心より考へいてたる五十連音真十鏡の書、そこかしこに筆くはへさせ給ひてひきなほしたまへるのみならず、めつらかなるはし書をさへにそへて給へることのうれしくかたしけなくて、このよるこひはつたなき鳥の跡にはえしもつくし侍らし。さて又陸奥人石金氏古言本音考といふ書かきあらはされたるよし、いひおこせ給へるをもふき」(十一オ)うけたまはり侍りぬ。さそなめつらかなるものに侍らまし。又上古代は清音のみにて濁音はなしといへる説もありけるよしにて、おのれにもそれを考へ見よとおほせこともうけたまはり侍りぬるによりて、すなはちすきにしころいさ、か思ひよれることともかきおきつるもの一まき侍りければ、こたひ奉るになむ。御心にとまるふしは待るましきものから、も、ちかひとつもとりもちひゆるさる、事

も侍りなましかはとてなむ。又おほきみの定とて、これも「十一」はやくより思ひよれりしことにて、ものにかきつけおきつるを、このころ清書してよき便に侍れば、これはた奉るになむ。なほかゝること、もはいくらも侍りければ、またのたよりにも奉るへし。いてやおのかしわざよ、もとよりいたりすくなく何ひとつたにしいてたることも侍らすて、大人の見たまはむには、つたなくおもほしめさむことのみに侍らんを、ざりとていか、はせん。えもたしあへねは、たゝなにはのうらの何こともあしからむをは、ひきなほしたまはむことをたのみ「十二」ところにかくなん。さてなんおなし学ひのともにも見せもし侍らまし。また御心におもほさんすちをも、よしあしとたに巻のはしめに御はし書のさまにものしてたまはらは、いとなむうれしかるへき。あなかしこ。又まうす〔注D〕。まことや、久しう御ありさまもつけたまはらざりしを、こたひかくたひらかにおはします事たしかにうけたまはり侍りて、かへすくうれしくなんおもひ給ふる。豊平若山よりかへりては、いつしかと五年をも経侍れば、いたくな「十二」つかしくおもひたまへらるゝを、このとしのうちにはえしもいてたつましくおもひ給ふるを、いかて来むとしのはるなどには、かならずまゐり侍りてと、いまよりおもひかけはへるになん。

六月廿三日文政十一年也

木村豊平

藤垣内大人御許に奉る

【十二】赤間関新地より神鏡を掘出たるゆゑよしを、有馬文五郎直定かこへるに、かきてあたへたる詞

長門国赤間関伊崎ノ新地といふ地より鏡一「十三」面をなも掘出

たる。そはその里の百姓長七といふもの、家つくるへき屋敷にその所をものすとて、そこよりほり出たるなりけり。鏡のわたり四寸はかりなる大さにて、うらに大神宮といふもしあり。おもてはことなることなくて円形なり。すへてのさまいと古代の物とこそおほゆれ。これによりておもひ考ふるに、そのかみ何人なりけむ、かけまくもいとまかしこき 大御神の御霊をしも、ことさらにいつきまつらむの心にて、かくみたましるにと「十三」てつくりまけたるにもあるへし。さるをいつのころにか、彼ノ地にはかくるへましけむ。そのゆゑはしるへきよしなきを、いまかくほり出て、やかてその御鏡を神さねとあかまへまつりて、其所に御室をたて、いはひまつれるは、いとくゝいそしきわざになもありける。そもくゝ此里わたりは、すへていつきしまの大神のうしはきませる地なるを、そのところよりしもかく此御鏡のあらはれいてたまへるは、これはた其よしあるへき事にこ「十四」そあらめ。さてそのほりいてたる時は、文政十二年三月廿五日のことにて、そのよしかきたまひねとこへる人は、その里人有馬直定なり。かくしるすは、同年の五月廿八日、木村豊平かこしこみかしこみもしるす。

【十三】文政十二丑のとし九月廿五日故鈴屋大人乃御霊乃御前尔申詞「廿九日二会ノアルヘキヲ今日ニナリタリ」

秋津彦雅櫻根大人乃命乃御霊乃御前尔申久、汝命者生乃極古学乃御心乎尽志

給比、許己多玖力書籍等乎書頭志給比、曾許婆久力人等「十四」ウ、毛乎、弥獎

来須須奈奈給比、教前上登志給比、御功乃世尔类無支程者、今更尔言尽比、難支事

乎會、其広厚支支御恵尔依志、早久十年余遠年、御跡継須麻大平宇志乃御教

子止成成多、遠遲奈久拙支、豊平等我友賀良母、古乃道乃片端乃加々都々注E〔注E〕
宇加賀比悟知事得有恩頼季畏美、宇礼斯美思給布〔注F〕。故許古カシ今
年乃九月廿五日、吾藤垣内乃奥乃小床母、伊豆乃盤境止掃清、汝命乃御
靈志勢奉利、其御傍与歌読人会母、歌読麻、豊平毛加利波一〔十五才〕志有
聊乳、其事予宇礼志美思与御靈乃御前止額突支奉礼、禱言申志奉禮。今母去前母
豊平等之字乃業手弥助尔助賜比、弥奨尔奨采給比守幸依給比、牡鹿成膝折伏勢、
鶴自物頸根衝拔与、恐美恐母申給派久申注G〔注G〕

右紀伊国若山師のもとにありけるほとにかけたるなり。

【十四】みつからかける医書徴家要領の後にかきそふる詞

世の人の病ををさむるくすしのくすりの道と〔十五ウ〕いふは、か
けまくもかしこき大穴牟遲大神、少毘古那大神二柱の大神のはしめ
ましつること、日本書紀の神代巻に見えて、たれしもよくしれるか
ことし。又そのわざをおこなひましつことは、稲羽の白兎の身を
そこなひやふりてなやめるを、大穴牟遲大神の蒲をとらしめて、た
すけをさめさせましましけること、古事記の上巻に見えたり。これ
らなむそのはしめにはありける。かくて世にありとある人の、やま
ひにしつみうき世にくるしまむその〔十六オ〕わざはひをのかれ身
を事なくありふるも、ことごとくに此二柱の大神の大御霊によりて
なりけり。されと後世までに神の御みつから其わざとりおこなひた
まふへきにあらざれば、そのた、しき道を此所にをしへかしこにつ
たへおきて、そののりを定め世にかしこき医師をいたしたまへるな
む、此大神のおほき御おもひはかりなるへき。しかるに、いつのこ
ろよりかたえたりけむ、吾かいにしへのとて^注たしかならぬを、此

ちかきとしころ、をら〔十六ウ〕^注たのからくにより〔注H〕つた
へきたるは、そののりあきらかに、いたらぬくまなくやめる人にか
けてこ、ろみるにも、おほつかなきところなくいとた、しくして、
かの二柱の大神のはしめたまへるそのかみおほえていとたふとし。
今の世は人の身のもちさままかはりきぬるゆゑにやあらむ、いにし
へにはいまたきえぬやまひもおほく出来て、おほきにまれすくな
きにまれ、此うきせにか、らぬはも、ちにひとりもなかるへしとい
ふはかりなれば、またそれを治むる〔十七オ〕わざもことさらにく
はしくせすてはえあるましきを、神の御たまはあやしともあやしき
ものにて、此ときしもはるかなる西の国のくすしの道を、吾 皇大
御国につたへきておほきなるたすけとなりきたるは、あるかなかに
たふときことならずや。外国よりつたへおこするもの、おほかたは
なくてもあるへくおもはる、もの、みおほかるを、此みちのみはか
へすかへすもうれしくたのもしきわざなりけり。そもくこのをら
にたの〔十七ウ〕^注のそのはしめを思ふにも、この二柱の大神のお
ほみたまよりそいてたるなるへき。そは少彦名大神とこよの国にわ
たりまして、其くに国をつくりかためたまはむおもふき、古事記日
本書紀等に見えたるかごとくしあれば、この道をもをしへおきた
まへりけむとおもひさためらる、なり。か、れはいまの世にしては、
くすしに心さ、む人は、此をらにたの医師の術にもつきて、た
しかにあやまちなくた、しくよの人のやまひを治む〔十八オ〕そ、
二柱の大神の大御心にもかなふへからむかし。さてさきに此書をあ
らはせるは、このうきせにしつみてくるしまむ人に、此大神の大御
霊の幸をわけほとこさむとてなりけり。なにくれのやまひひとつと
していまくしからぬはなきか中に、これのみはことにはやくおさめ

すて月日をふれば、たけき物のふもいさむこ、ろくちけ、を、しきますすらをもちからぬけてなすわさかなはず、[○]るはしき手弱女も見にくきまてにかた」(十八ウ) [○]さへかはりゆきて、世にふるかひなるもあれば、かくかきいて、とにかくにいへるなり。そももとより、おのれひとりちからにてなしうへきことかは。神のちはひ、君の御かけ、親のめくみ、師のなさけ、朋友のまこと、何とかれによりこれにたすけられてなりいつるわさなれば、ゆめゆめものにほこらむとてか、らむや。た、このうれひにくるしまむ人をすくひたすくることのはしにもと、おもふ心のおくを見むひとよくおもひはか」(十九さるへし。こ、に山田義章医生、あさよひにおこたることなく、此みちにこ、るふかめていそしみまふるこ、ろさしのあつくまめなるより、世にひろくすりまきにせまほしとこひけるに、そはいとよきことなりといひゆるしやるついでに、かねておもひとりたるゆゑよしをひとくたりかくなむ。ときは文政十二年十二月廿八日、紀伊国山田氏の家に旅居せるほとなり 木村豊比良

【十五】花の山口の跋」(十九ウ)

此[○]卷は藤垣内翁のうひ学びの爲にとてえりあつめおかれたるなり。そのよしは翁の端文に見えたるか如し。豊平思ふに、今の世の人、家の業しけいとまのひま少き人は、歌学ひのみにか、つらひて道の学ひにえ物せぬ人あり。いとくちをしきことなり。さりとして御国の物理学ひは、詞の学ひなくて、はたえあらぬわさなれば、まつ歌よみならふに、此三代集の心高きによりて心詞のみやひをしらむにつ、まやかにして入」(二十オ) やすかるべく、いとよきしるへふみなりとなむ思ひよりて、はやく世にひろめはやと、同じ学ひのは

らから田中延香、中村広定二ぬしかたらひて、かく摺巻とはなせるなりけり。此よし一くたりかくなむ、文政十三年春、紀の国に旅居せるほとしるしぬ。

周防国 木村豊平」(二十ウ)

《本文の注》

A—底本「あつらき跡」の「あつらき」をミセケチにして頭欄に「あさらけき」。

B—底本「おりくる」の「り」をミセケチで「ち」に訂正。

C—以下は長歌。豊平は長歌を多く残している。

D—「又まうす」の上、一字分空白。ここから追伸か。

E—「加々都々」は不審。「かつかつ(かつがつ)」をこのように表記したものが。注Gではそのままに置く。

F—底本のままでは「給ふ」だが、内容上は下二段活用「給ふ」の連体形「給ふる」になるべきか。

G—以上の【十三】本文は宣命書きとなつていたので、以下にわかりやすく書き下す(平仮名・濁音・ルビを適宜用いた)。秋津彦雅櫻根大人の命の御霊の御前に申さく、汝命は生の極み古学びの御心を尽し給ひ、ここだけの書籍等を書き頭はし給ひ、そこばくの人等をも、いや褒めにすすめ誘なひ給ひて、教へさとし給へる御功の世に類ひなき程は、今更に言ひも尽しがたき事なるを、其の広き厚き御恵に依りてし、早く十年余り遠つ年、御跡継ぎます大平うしの御教子と成たる、をぢなく拙き豊平等が友がらも、古の道の片端をも加々都々うかがひ悟り知る事得てし有る恩頼を畏み、うれしみなも思ひ給ふ。故ここに今年の九月廿五日、吾が藤垣内の奥の小床を、伊豆の盤境と掃ひ清め

て、汝命の御霊をしませ奉りて、其の御傍にて歌読人会ひて、歌読むまにまに、豊平も加はりてし有ければ、其の事をうれしみ思ひて御霊の御前に額突き奉りて、禱言申し奉る。今も去前も豊平等の学の業をいや助けに助け賜ひ、いや奨めに奨め給ひ守り幸へ給へと、しじもの牡鹿成膝折り伏せ、うじものうなねつ鵜自物頸根衝き抜きて、恐こみ恐こみも申し給はくと申す。

H―「をら[□]た」は虫損があるが、「をらにた」として後出。「をらにた」はオランダ、「からくに」は外国の意であろう。なお、『〳家要領〳』（架蔵本）には、【十四】の全文が「〳家要領乃後迹可記曾布留詞」と題されて巻頭に置かれる（全文万葉仮名）。この中では「をらにた」は「遠羅你陀」と表記されている。

（おの・よしのり）